

南海トラフの地震活動の長期評価（第二版）

主文図5

第2版抜粋

（主文4. 南海トラフで次に発生する地震について）

過去に起きた大地震の発生間隔は、既往最大と言われている宝永地震（1707年）と、その後発生した安政東海・南海地震（1854年）の間は147年であるのに対し、宝永地震より規模の小さかった安政東海・南海地震とその後発生した昭和東南海（1944年）・南海地震（1946年）の間隔は約90年と短くなっている（図2）。このことは、宝永地震（1707年）以降の活動に限れば、次の大地震が発生するまでの期間が、前の地震の規模に比例するという時間予測モデルが成立している可能性を示している。時間予測モデルには、様々な問題点があることが指摘されているものの（説明文第4章参照）、**このモデルが成立すると仮定した場合、昭和東南海・南海地震の規模は、安政東海・南海地震より小さいので、室津港（高知県）の隆起量をもとに次の地震までの発生間隔を求めると、88.2年となる（図5）。**評価時点（2013年1月1日）では昭和東南海・南海地震の発生から既に約70年が経過しており、次の大地震発生の切迫性が高まっていると言える。

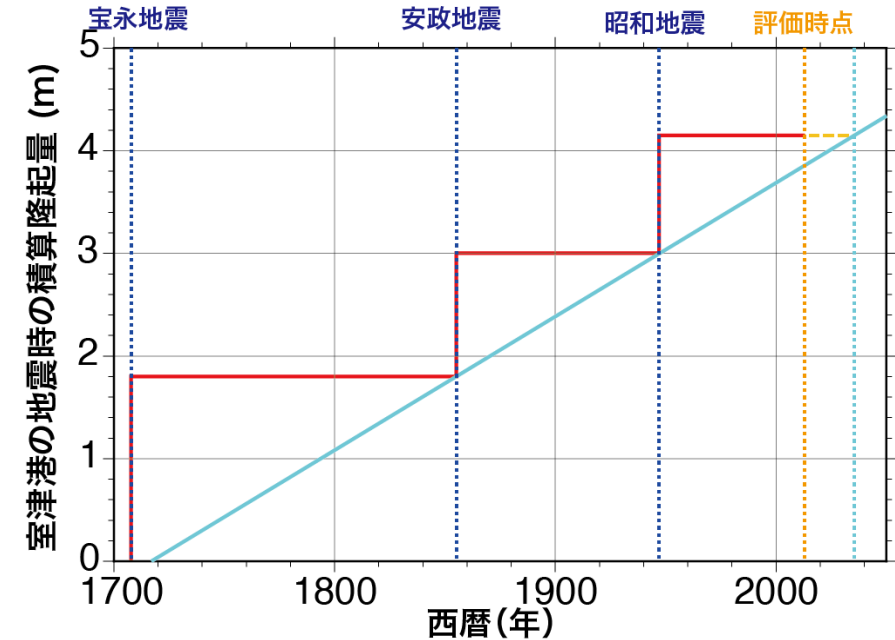


図5 室津港（高知県）における南海地震時の隆起量と地震発生間隔との関係

階段状の赤線の縦軸が地震によって隆起した量を示す。水色の線は地震時の積算隆起量の平均隆起速度。このモデル（時間予測モデル）によると、次の南海トラフで発生する大地震は昭和の地震の後、約90年後に発生することになる。

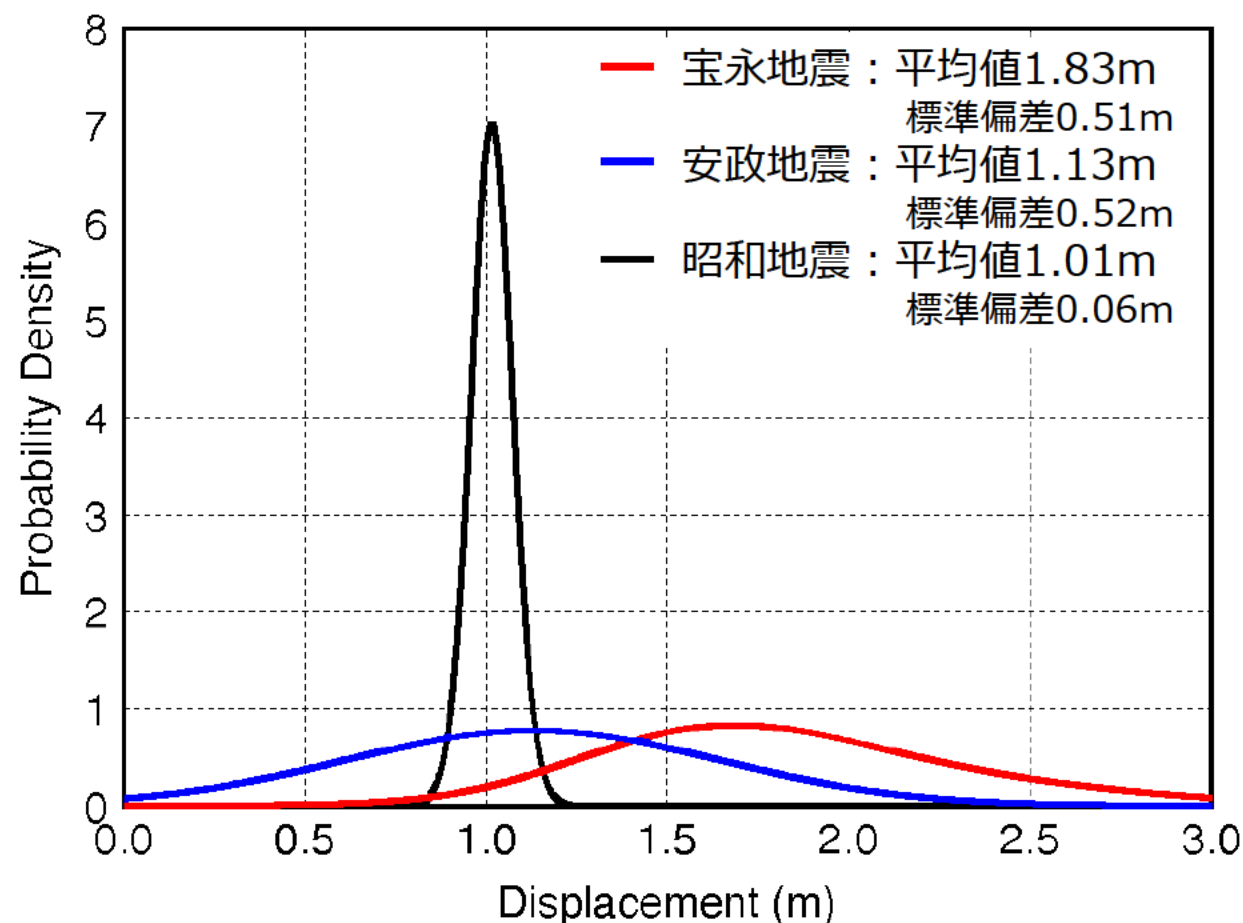
南海トラフの地震活動の長期評価（第二版、一部改訂）

主文図5（案）

第2版（一部改訂）（案）抜粋（主文4．南海トラフで発生する将来の地震について）

過去に起きた大地震の発生間隔は、既往最大と言われている宝永地震（1707年）と、その後発生した安政東海・南海地震（1854年）の間は147年であるのに対し、宝永地震より規模の小さかった安政東海・南海地震とその後発生した昭和東南海（1944年）・南海地震（1946年）の間隔は約90年と短くなっている（図2）。このことは、宝永地震（1707年）以降の活動に限れば、次の大地震が発生するまでの期間が、前の地震の規模に比例するという時間予測モデル（すべり量依存モデル）が成立している可能性を示している（図5）。時間予測モデルには、様々な問題点があることが指摘されているものの（説明文第4章参照）、このモデルが成立すると仮定した場合、昭和東南海・南海地震の規模は、安政東海・南海地震より小さいので、次の地震までの発生間隔は約90年より短くなることになる。評価時点（2025年1月1日）では昭和東南海・南海地震の発生から既に約80年が経過しており、次の大地震発生の切迫性が高まっていると言える。

南海トラフの地震活動の長期評価（第二版、一部改訂） 室津港における隆起量データ（説明文）



（説明文） 図● 室津港（高知県）における南海地震時の不確実性を考慮した隆起量データ

南海トラフの地震活動の長期評価（第二版、一部改訂）

主文図5（案）

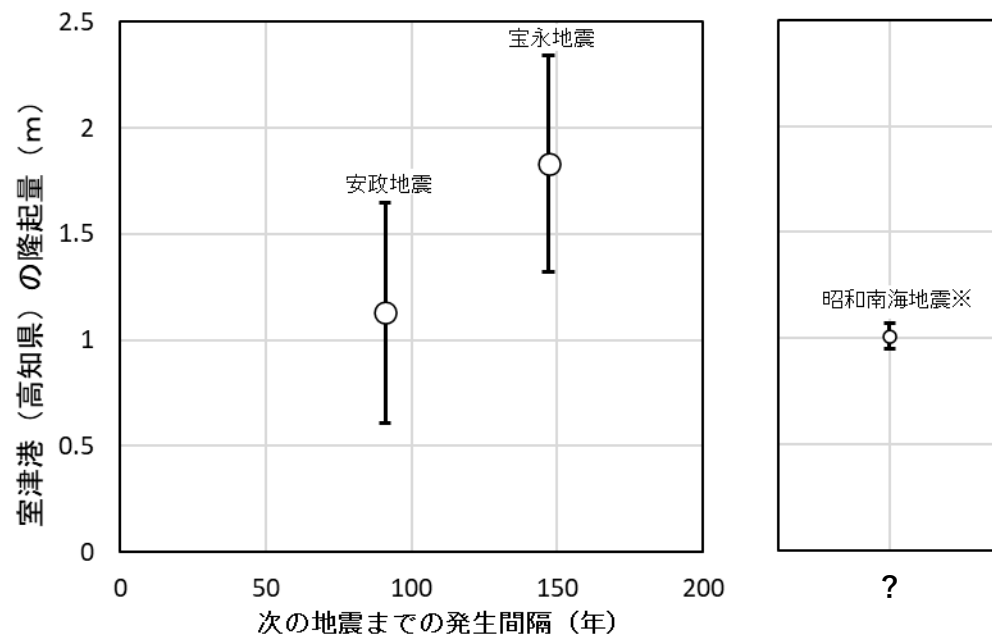


図5 室津港（高知県）における南海地震時の隆起量と次の地震までの期間との関係

丸印は各々の地震による室津港の隆起量の確率密度分布の平均値を示し、エラーバーは同分布の標準偏差（ 1σ ）を示す。宝永地震および安政地震の隆起量と次の地震までの発生間隔との関係はおおむね比例関係にある。※昭和南海地震については、次の地震が発生していないため次の地震までの発生間隔は不明である。